

まごころを、君に

望夢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕はただ、父さんに見て欲しかったんだ…。

目次

知らない天井	57
欠けたココロ	41
使徒、襲来	33
母との約束	20
シンジ襲来	1

シンジ襲来

忘れないでね。

母さんと約束しましょう。

この先、何が起こつても。

世界中の人達の幸せを、あなたが守るのよ。

それが思い出せる最も古い記憶で、母さんとの、最後の言葉だった。その時、母さんがどうしてその言葉を僕に送ったのかわからなかった。

そして母さんは、帰らぬ人となった。そんな実感が湧く暇もなく、僕は父さんにも会えなくなった。

大好きだった母さんが死んで、父さんだつて辛かつたんだろう。だから僕は父さんを待つ事にした。

いつかきつと、迎えに来てくれるだろうと子供ながらに。毎年一度だけ、父さんとは会うことができる。母さんのお墓の前で。

それでも父さんは僕に何も言葉を掛けてくれない。僕を見てもくれない。ずっとお墓を見ていて、そんな父さんの背中は泣いている様に見えた。

小学生になる頃には父さんがいつか迎えに来るかもという淡い期待は何処にもなかった。

それでも良い子ではいようと努力してみた。母さんの事を知りたくて、叔父さんに色々と聞いてみたけれど、叔父さんもあまり母さんの事を話してくれなかった。だから色々調べてみて、母さんはとても有名人だとわかった。かといって芸能人みたいな有名人じゃなくて、とても頭の良い学者さんだったという意味だった。

母さんみたいに頑張れば父さんは僕を見ってくれるのかなと、必死で勉強を頑張り始めた。勉強なら叔父さんも叔母さんも嫌な顔をしないで教えてくれたから。

それでもどうしようもないときはどうしようもない。

小学生の頭で頑張っても解けないことは多かった。だから図書館で調べたりして頑張った。この頃から叔父さんと叔母さんもあまり勉強を教えてくれなくなった。

同級生に教わろうにも、僕がこの頃勉強していたのは中学3年か高校1年程度の事だった。小学生でそんな勉強をしていたら変な目で見られる事もあった。

その間も毎年一度だけ父さんとは会うことが出来た。

それでも父さんは何も言ってくれない。

何をしたら父さんは僕を見てくれるのだろうかと必死に考えて、もつと母さんみたくになれるように髪を伸ばし始めてみた。色は変えられないけれど、せめて母さんみたくに髪が長くなって、母さんの面影があれば父さんも僕を見てくれるんじゃないかと思いついた。僕は正直少しバカだったかもしれない。

中学校に上がって、でも授業自体は既に自分で勉強をしてしまった所だったから苦もなく復習感覚で授業を受けていた。

テストも全教科9割り正解は普通。でもやっぱり忘れてたりする所もあって、これじゃあ父さんだつて僕を見てくれないと少し落ち込みながら、学年末はオール満点を叩き出した。やっぱり東方の三賢人と呼ばれてすごい人だった母さんの子だから、そんな母さんに恥ずかしくない様になりたかった。

でも一番悩んだのは「将来の夢」という作文の宿題だった。

バカ正直に書くと言われそうだし。かといって「夢」と呼べる様な事もなかった。

父さんに見て欲しいから母さんみたいになりたかった。

自分の人生を振り返ってみたらそんな言葉で締め括られてしまう。そしてこれから先の事すらなにも考えていなくて。父さんに見てもらえたその先の事をなにも考えていなかった。母さんみたいになつて、じゃあ自分は何をしたいのか考えて、やっぱり答えは出なかった。それでも宿題をすっぽかすわけにも行かないから、誰にも言わないことを念を押して担任の先生に頼んで、ありのままに作文を書いた。



中学2年になって暫く。とはいっても学校生活が1年生の頃と何が変わるのかと言われても、後輩が出来ること以外には特になにもなく過ぎていく。

ただそんな何事もない1日は、かなり違う1日に変わった。

「碓、シンジ君。だね?」

「え…?」

学校の校門の前。黒い車が止まっていて、黒いスーツの男の人が周囲を見渡していて、その中心に居る初老の男の人が僕に声を掛けてきた。

「久しぶり。といっても、君は覚えていないかもしれないが」

優しい人だ。しかし僕が言葉を発せずにいるとそんな言葉を掛けてくる。

言葉から目の前の人と自分は会ったことがあるらしい。久しぶりという言葉で、暫くは会っていないということはある。覚えていないという言葉はそれほど記憶できるかどうか曖昧な時期かもしれない。

新しい記憶から辿るのではなく、古い記憶から辿ってみる。

「しかし見違えたよ。まるで君のお母さんみたいだ」

「……冬月、先生…?」

母さんというフレーズで思い出したのは、母さんと約束した次の日の事。

実験室の様な場所で紹介された人の中に居た。あの時から白髪になっていても全体的な雰囲気が変わっていない。10年も前の事なのに思い出せたのは――。

「驚いたな。私の事を覚えていたのかい?」

「す、少しだけ、ですけど」

母さんがいなくなった日だったからだとは、少し嬉しそうに微笑んだこの人の前では言えなかった。

「そうか。急に押し掛けてしまって悪いのだが、私に付き合ってくれ

んかね？」

そうは言われるが、断れる雰囲気でもなかった。黒いスーツのボディガードみたいな人たちを連れていて、黒塗りの車に乗っていて。もしかしなくても偉い人なのかもしれない。

「わかりました」

断れない上に、なにより周りに注目されていて嫌だったから直ぐに頷いた。

黒いスーツの男の人に手荷物を預けて、僕は車に乗った。後ろからじやわからなかったものの、リムジンの様に少し縦長の車だった。

「なにか飲むかね？」

「あ、はい。頂きます」

勧められたものを断るのは相手に謙虚さというものを見せられるけれど、気遣いを不意にしてしまう事もある為に受ける厚意は受けた方が良いらしいというのを本で読んだ事がある。

アイステイを出されて、それに一口口をつけてから僕は口を開いた。

「あの、冬月、さん…」

「ん？ なにかな」

「その。僕のこと、母さんみたいだって」

父さんには一言も言って貰えなかった言葉。叔父さんも叔母さんも、僕のこの事にはあまり触れなくなった。

だから母さんを知っている人には自分がどう映っているのか気になっちゃった。

「ふむ。君のお母さん。ユイ君とは大学の教え子なのだが。一目見たときは正直ユイ君が其処に居るのではないかと思っただよ。見た目は似ているがユイ君よりも君は子供だ。だが雰囲気は似ていたのだよ」
「僕と、母さんが…」

母さんみたいになろうと頑張って、そう言われたのは初めてだった。叔父さんも叔母さんも、母さんの事については腫れ物を扱うような感じだったし。父さんはなにも話してくれないから母さんの見た目は知っていても、どんな人だったかまではわからない。そういう記

憶を積み上げる前に、母さんは死んでしまったから。

「成績表を見せてもらったが、君は優秀だ。きっと将来、ユイ君にも負けないくらいの逸材になるだろう」

「……そうだったら。父さんは」

僕を見てくれるのだろうか。

それを最後まで口に出れなかった。でも、母さんみたいになれると言われて。お世辞かもしれないけれど、嬉しかった。

嬉しいと思うことさえ、そういえば久しぶりだったかもしれない。

「あの。……迷惑じゃなかったら、母さんの事。教えてくれますか？」

「ああ。構わんよ」

そう言って、冬月さんは僕に昔を懐かしむ様に母さんの事を教えてくれた。

◆◆◆◆

碓 シンジ。

やつとユイ君の一人息子に会おうと思ったのは偶々だった。

計画の為、サードチルドレンとして招集予定だった彼の事は報告書で知っていたが。少し変わった子だと昔から思っていたが、このところ少しユイ君に似てきた気がする。というよりも中学生になってから髪を伸ばし始めたらしく、今ではユイ君よりも少し長いだろうか。

遺伝子的にはユイ君の遺伝子が多大に仕事をしていてやつの面影は髪の色という位だが、やはり親が居ないと子は親を求めるものなのだろう。

だがそれもまた違うという事を知ったのはつい先日的事だ。

「将来の夢」と題された作文課題。セカンドインパクトによって一度地獄を見た人類だが、しかし今も変わらずこのように子供たちは平和に学んでいる。いや、そうなるように人々が努力したからだ。15年という月日を掛けて。セカンドインパクトが起こった直後の数年は、沿岸部の都市はひどい被害を受けた。それによって日本でさえ一時期は治安が乱れ、正しく地獄のような光景もあった。だが今はそれ

を語るべき時ではない。

ユイ君が居なくなつてやつが変わつた様に。

親が身近に居ない彼も歪んでしまつてゐる。そう仕向けてゐるのだから今更だろう。

だが報告書で見る度に、彼は母親に似て優秀な面があるというのがわかつてくる。近頃はよりユイ君に似てきた。その理由はなんとも子供らしい所と、意外と頑固そうな所にふと彼女の気配を感じてしまったのだ。

一度様子でも見に行こう。

自分達の都合で子供の将来を壊すのだ。これはその罪に対する罰なのだろう。

実際に話してみて、その物腰の軟らかさはユイ君と似ていた。そして、他人と一歩距離を置くところは父親に似ている。そう改めて見ると、やはりあのふたりの子なのだ。

母親の話しに目を煌めかせて聞き入る所は母親に似ている。

自分の事に関する事で口下手なのはやつに似ているが、それでもちゃんと話そうとする所は彼女の血が後押ししているのだろう。

「特務機関ネルフ?」

「そうだ。国連直属の非公開組織になる。私や碓、君の父が働いている所だ」

「国連直属って。国家公務員って事ですよね。もしかして冬月先生って、そのこの偉い人。だったりします?」

「まあね。一応副司令の役職を預かつてゐるよ」

「副司令って。物凄く忙しい身じや」

「なに。予定はしっかり開けてある」

一を聞いて、見て。そこから10や100を考える。まだ人生経験が足りないものの、その発想と思考展開にはやはり彼女の影を感じせすには要られなかつた。

そして此方の事を案じて気にする所は彼自身の良さか。他人に対して臆病な部分がシンジ君には良い方向に働きながら、その実内面的な人柄を作つてゐるのだろう。人付き合いが不器用なのは親子揃つ

て同じ様だ。

「すごい……ジオフロントだ」

「ああ。地球という生命の神秘とも呼べる空間だよ。最も、8割が埋まっているがね」

「埋まっている？ ……じゃあ、見えている様なドーム型じゃなくて完全な円形をしているんですか？」

「調査の結果ではね」

「そうなんですか。なんだか夢があって良いですね」

「夢…か」

その優秀さが少し見たくなくなって余計なことも言ってしまったている気もするが、思案する顔も彼女とそっくりだ。

「もしかしたら地球の外からやって来た誰かが遺した物かもしれないって考えると、ロマンとかありませんか？」

「成る程。ちなみに何故そう思ったのかな？」

そう考える刺激的な発想は本当にユイ君と似ている。まさかそう考えると。

「月も元々は地球に隕石がぶつかって出来たって言いますし。完全な円形って自然に出来るのは難しいですし。そんな突拍子もない発想だから何故と訊かれても上手く説明出来ないんですけど」

「いや。人は時としてひらめきをもって答えを出す事もある。突拍子もない発想であつてもそれが答えだったと言うことも時としてあることだ」

「わかるような気がします。ひらめきって、どうしてその答えが出てきたのかわからなくて。でもそれはきつと必要なことだから出てきた答えで。神さまが教えてくれる答えなんかじゃないかって」

「シンジ君は神を信じているのかな？」

「さあ。無宗教ですから。神頼みはしますけど、これといって神さまを信仰してはいませんね。あ、でもお稲荷さまとかは信じてます。八百万の神さまとか」

「ほう。シンジ君はそっちの方に興味があるのかな？」

「ええ。日本ってこんなに狭いのにかくさん神さまとかが居て面白い

なあって思ってたらしい夢中になっちゃって」

生物学を専攻していたユイ君とはまた違うものの。14歳と考えたら物識りではあるだろう。小学生が独学で高校生レベルの勉強をしていると知ったときは血は争えないと思いましたが。ユイ君もやっも学歴は優秀な人間だ。そのサラブレッドなのだから何れはこうなっていたのだろう。

やはり得意分野の話ともなると明るく得意気に話す部分はまだまだ子供であると感じさせられる。

シンジ君をネルフまで連れてくるという予定外の事をしているが、修正は容易だろう。遅かれ早かれ彼は此処に招かれるのだから。

ただ。必要以上に傷つく事もないだろう。

「どうかな？ 一局」

「あ、はい」

副司令室に招き、将棋盤を出し、駒を並べていく。

生まれれば駒を指す音だけが響く。指しなれて居ない為に彼の方は一手一手ぎこちないものの、何をしたいのかは見えてくる。

「お呼びでしょうか、副司令」

指していると呼び出した女性がやって来た。

「ああ。待っていたよ、赤木君。彼に第7ケージの物を見せてやってくれ」

「第7ケージですか？ ならその子は」

「察しの通りだ」

「この事を碇司令は」

「なに。責任は私が持つ」

「わかりました」

赤木君の言うことも最もだが、これも遅かれ早かれだ。いや、きつと似合わない情が湧いているのだろう。やつは雑務はすべて此方に投げてくる。シンジ君の管理すらもである。父親の自覚がないというか、ユイ君しか見えていないというか。

人のことは言えないが、せめて少しでも報いる事があるのならそれは彼に出来ることをしてやる事くらいだろう。

「あの。僕に見せたいものがあるみたいですけど。いったいどんな物なんでしようか」

話が一段落したところで彼が入ってくる。少し不安そうなのは態々人を呼んでまで案内させる意味を理解しての事だろう。

「それは見てのお楽しみというものだ。案内は赤木君に任せるから、彼女に着いていきなさい」

「…わかりました。ありがとうございました。母さんの事をいっぱい知れました」

「聞きたくなったらいつでも来なさい。まだまだ話していい事もたくさんある」

「はい。ありがとうございます。冬月先生」

そう言つて赤木君に着いていく形でシンジ君は出ていった。部屋を出る時にも一度振り返つて頭を下げる身の入りようだ。

年甲斐もなく少しはしゃいでしまったようだ。

10年も。一方的にだが見守ってきた子をこれから自分達の都合で戦場に叩き込み、そして文字通り地獄に落とさなければならぬのだ。

それを背負つてでも、やらなければならぬ事がある。

人類の未来の為。そういえば聞こえは良い。

そういう聞こえの良い言葉で騙し、あの子を戦わせるのだから、せめて戦うための覚悟くらいは持たせてやりたいと思つてしまった。

「果たしてこれで良いのだろうか。ユイ君」

将棋盤の上を見る。あのまま指していたら12手先で負けていた。趣味の範疇だったが、それでも頭の回転と発想力では既に追い越されているかもしれない。その優秀さがどの様に成長するのか。

あり得ないという事を忘れ、少しだけ楽しみに思つてしまった。

◆◆◆◆

碇 シンジ。

碇司令の一人息子。マルドゥック機関に選ばれた三人目の適格者。

しかしまさか副司令自らが連れてくるとは思わなかった。

予定では招集するのはまだ先だったはず。そして初号機を見せるのも。計画の前倒しなんて聞いていない。いったい副司令が何を考えているのかは汲み取る事は出来なかった。

「あ、あの……」

「何かしら。あと先に忠告しておくけれど、くれぐれも離れちゃダメよ？ 探せるけど、この広大で迷路みたいな施設で迷ったら餓死寸前で見つかった。なんてこともあるのよ」

「は、はいっつ」

和ませるつもりが少し脅かしが過ぎたかしら。

「あつ。ぐ、ごめんなさい……」

「良いのよ別に。その方が迷わないでしょ？」

「あう。で、でも……」

白衣を摘ままれた位でどうとは思わない物の、あの人の息子だと言うだけあって同じ様に不器用で、少し可愛いげがあった。

それでも見た目は完全に母親に似ている。着ている制服が男子用でもなければ女の子に間違われても不思議じゃない。実際副司令の部屋に入った時に見た後ろ姿は女の子に見えたもの。

「あの。冬月先生が言っていた僕に見せたいものっていうのは」

「そうね……」

初号機を見せるのだからある程度は話す必要があるとしても今から何処までを話して良いのかというものに悩む。

「端的に言ってしまうえば私たち人類の未来を託すものよ」

「人類の、未来？」

少し穿った答えを出す。その言葉の意味を考えて、彼はそれ以上の事を聞き出そうとはしなかった。今は訊くときではないと判断したよね。何れにしろ見せる時に説明するし、見る時に説明されると考えた。

人の機微には聡い子なのかもしれない。

「自己紹介がまだだったわね。技術一課E計画担当の赤木リツコ。よろしく、碓 シンジ君」

「あ、はい。よろしくお願いします」

自己紹介を終えたあとはほぼ無言のまま歩き続け、そうして第7
ケージにまで彼を連れていく。

「暗いから足元に気を付けてね」

「は、はい」

途中ボートに乗って直接アンビリカルブリッジに乗り付ける。そ
して彼の手を引いてボートから降りたあと、ブリッジの真ん中まで案
内して、照明を点ける。

「わっ!？」

照明を点けた事で目の前には初号機の強面。彼は驚いて尻餅を着
いてしまう。

「あら。大丈夫？　びっくりさせちゃったかしら」

「だ、大丈夫です」

少し赤面しながらも立ち上がる彼は真っ直ぐ初号機と向き直った。
その目に映るのは――懐かしきとも、悲しきとも読み取れる複雑な
顔。

「…母さん――」

「え?」

初号機に向けて母さんと、はつきり口にしたシンジ君に溜まらず声
が漏れてしまった。この子は知っているというの?　いえまさか、そ
んなことはないはず。

「…実は10年くらい前にも僕はこういう所に来たことがあるんで
す。人類の明るい未来を見せてあげたい。母さんの最後の言葉です」
一度こちらを見て、寂しげな表情でもう一度初号機を見上げた。

3、4歳の頃の記憶があるというシンジ君。大人の10年ならばま
だわかる話でも、そんな子供が10年前の記憶を覚えているものかど
うか。

「母さんが居なくなつた日ですから。だから冬月先生のこと覚えて
いたんですけど」

「そうなのね」

それでも強烈な記憶であれば残っていても不思議ではない。そう

いう事であって、そして、この子は思った以上に聡い子なのかもしれない。

「教えてくれますか？ このロボットの事。母さんが何をしていたのか」

「厳密に言うと、ロボットじゃないわ。人の作りだした究極の汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。建造は極秘裏に行われた、我々人類最後の切り札よ」

「…これが必要になる程の何かがやって来る。10年前から開発しなければならなかった決戦兵器。セカンドインパクトと関係があるんですか？」

「何故そう思うのかしら？」

「その返し方が半分答えのような気がしますけど。それに、巨大質量隕石の衝突っていうのも無理があります。南極大陸が蒸発するほどの物なら落ちる前に避難勧告だったり、テレビや雑誌で取り上げられなくても良いのにそんな記録は何処にもない。その事実が10年以上も定説として言われていますから今更誰も疑問には思いませんけど。それに決戦兵器ってことは、このエヴァンゲリオンは何かと戦うために生まれた。火のない所に煙は立たない。ならこのロボットが必要ならニカがあつて、そして10年前から開発されていた事を考えて、じゃあ何故開発する必要があるのか考えてみて、一番大きな事件って言ったらセカンドインパクトくらいしかありませんから」

末恐ろしいというか。放つては置けない子になってしまった。或いは多くを教えるわけにもいかなくなってしまったとも言える。少ない情報でそこまで考えてたどり着ける。14歳の子供がと考えたら、天才の血はしっかりと受け継がれているという事になる。

「これを見たからには。見せたからには、僕も何らかの形でこれに関わるんでしようけど。教えてくれますか？ これに関わっている母さんや父さんが居る僕には知る権利があると思います」

「それを知って、あなたはどうするつもりなのかしら？」

「わかりません。でも、知りたいんです。母さんが何をしていたのか。父さんが何をしているのか」

未知への欲求。その顔は何故か母と重なった。両親揃って研究者なら、子もまたカエルという事なのかしらね。

恐らく自分が話さなくともいずれ知るだろうし。そして彼は自力で真実に辿り着いてしまうのではないかという漠然とした、淡い期待もあつた。

「セカンドインパクトが隕石の衝突というのはウソよ。15年前、人類は大型で人の形をした物体を発見したの。でもその調査中に原因不明の大爆発を起こしたのよ。それがセカンドインパクトの真実」

「じゃあ。このエヴァンゲリオンは」

「予想されているサードインパクトを未然に防ぐための物よ」

「…あるんですね。このジオフロントにも」

「ええ。それを狙って来るものが居る。それと戦うためにエヴァは造られたのよ」

「戦うために…」

サードインパクトと聞いて不安になってしまったのだろう。彼は暗い顔になって、それでも真実の一端に辿り着いた。ネルフ職員でなければ知ることが出来る情報。しかし、ただの14歳の少年が辿り着くには難しい真実。それを知り得た情報だけで導き出した。

「これは国家機密レベルの情報よ。それを知ったあなたはもう普通の生活には戻れないわ」

「なんとなく覚悟はしていました。監視付きの留置所送りですか?」

「まさか。ただあなたの処遇が決まるまでは地下に缶詰かもしれないけれど、悪いようにはされないわ」

「そうですか」

もう一度初号機を見上げる彼は何かを思っているのだろうか。辛く、何かに耐える様に顔を歪ませた。

「さ。行きましようか。シンジ君、お昼はまだでしょう?」

「え、ええ。まあ」

「案内するわ。ここの食堂、そこら辺のレストランよりおいしいのよ?」

「でも、良いんですか?」

「こう見えてわたしも偉い方の役職だもの。一緒に居れば監視の名目も立つし、施設内なら行動の自由もあるでしょう。ちなみに逃げるなんて考えたらだめよ？」 問答無用で拘束されるわ」

「わかり、ました」

副指令に連れてこられたのなら保安部の人間も見ているでしょうし。そこから問答無用で拘束されると釘を刺したら顔を真っ青にして頷いて。ちよっとかわいそうだったかしら。でも表情がコロコロ変わるのはあの人にはない魅力ね。それに頭も良い。氣勢も大人しいから少し気に入ってしまったわね。

「他に知りたいことはないかしら。必要以上の機密に触れない事なら教えてあげられるわよ？」

「じゃ、じゃあ。このエヴァって、どう動かすんですか？ 操縦って意味ですけど」

エヴァがどう動くのか。操縦系の話が気になる事というのは、ロボットの好きな男の子らしい質問に思えた。

「そうね。基本的にはパイロットの脳波で動くのよ。思考制御体感操縦式有人兵器って、意味がわかるかしら？」

「ごちやごちやレバーを動かさないと頭で考えて動かすって事なら。もしかして機体のダメージがパイロットにフィードバックされちゃったりします？」

「ふふ。あなたは優秀ね。ええ。機体を思考でコントロールするとう事は自分がエヴァでもあると同義なの。普段生活して身体を動かすようにエヴァを動かす都合上、どうしても痛みを感じてしまうわ」「特別な訓練もしないで誰にでも動かせる代わりに痛みを感じるって、少し嫌ですね」

「仕方ないわ。普通のロボットと違って、エヴァは人造人間。シンジ君の想像している様にレバーとかペダルでは動かさきれない。人の思考で動かすのが最も効率が良いのよ」

「でも痛みを感じるってことは最悪ショック死しませんか？」

「それについては今のところは何とも言えないけれど、神経接続をカットすればパイロットの安全は保障するわ」

「その分機体が無防備になるって考えたら奥の手ですよね」

「そうね。だからパイロットには致命的な痛覚以外には耐えて貰う他ないわね」

「便利そうで鬼畜ですね」

「そうかしら？ でも思い通りに動かせるのよ」

「それって手足が挽げようが生きていて思考が出来るならパイロットが出来るとてことと裏返しですよ？」

「そう。そういう事も考えられるのね。あなたは面白いわ、シンジ君」
「いいえ。そんなことは」

謙遜しているけれど、少しの会話で彼がとても優秀な人間だというのは理解できた。まるでマヤみたいね。少し仕込んでみたくなってしまうけれど。

「さて。この話題はお終いにしましょう。あなたを相手にしていたら終わらなくなってしまいそうだわ」

「す、すみません」

「怒っているわけじゃないから謝らなくてもいいのよ。あなたの年齢でこういう話題に着いて来れる子なんて早々居ないからつい楽しくなってしまうのよ。だから少しは自分に自信を持っていいのよ？」

「自信、ですか…」

そして基本的に褒められたことがないのもあって、そうして褒めると静かに嬉しそうに破顔している所も可愛げのある一面ね。本人は気づいていないのでしょうか。

「さ、行きましょう」

「は、はい」

彼を促してケージから出し、照明を消そうとした時だった。

「っ——?!?!」

背筋に感じたうすら寒い物を感じて慌ててケージを振り返った。でもそこには暗闇が広がり、警告灯の小さな光源によって薄っすらと初号機の顔の輪郭が見えたくらいだった。

「赤木さん？」

「何でもないわ。それと、リツコで構わないわよ。あなたとはこれか

「長い付き合いになるだろうから」

「そうですね。では改めてよろしくお願いします、リツコさん」

「ええ。よろしくね、シンジ君」

もう一度ケージを振り向いて、シンジ君が乗り込んだボートに向かう。気の所為よね。

◆◆◆◆

1日で僕の生活は急変してしまった。

冬月先生に連れられて、僕はとんでもない秘密を知ってしまってもよくあるスパイ映画みたいな知り過ぎたんだってという事にはならなくてホツとした。

そしてリツコさんに連れられて食堂に向かったけれど、食事の味は半分もわからなかった。でもパンケーキは美味しかったのは覚えている。

宛がわれた個室。昼食の後にやっぱり僕は帰れないことをリツコさんから伝えられた。きっとたぶん叔父さんと叔母さんの所にはもう帰れないのだろうと漠然とだけ確信していた。でも別に悲しいとは思えなかった。それよりも少しだけ父さんの傍に居られることが嬉しくて。不安だった。

父さんはこのネルフの司令。つまり一番偉い人だとリツコさんから聞いた。でも父さんは僕に会いに来るどころか伝言も何もない。留守なのか尋ねる勇気はなかった。そしてそれで近くに居るのに何も言っ来ないとわかってしまったら悲しくてどうにかなってしまいたいそうだったからだ。

翌朝、リツコさんが部屋まで迎えに来てくれた。

「おはようシンジ君。良く眠れたかしら？」

「はい。取り敢えずは、ですけど」

ぐっすり熟睡というわけにはいかなかった物の、身体は寝れているから精神的な疲労を少し感じるくらいだった。

「動けそうなら着いてきて貰えると良いのだけれど。無理そうなら部

「屋で休んでいても良いわよ?」

「いえ。大丈夫です。行きます」

態々リツコさんが来てくれたという事はその必要があるという事で。忙しいリツコさんの時間を煩わせてしまった申し訳なさもあって寝ていても気になつてしまうから着いて行くことにした。なによりももしかしたら父さんに会えるかもしれないだなんて淡い期待を持ちながら。

「じゃあ、このIDを無くさないで。それとこれを着て頂戴」

「白衣?」

「この方が遠目でも目立つわ。ここで白衣を着てるのは技術者だとわたくしくらいだから」

「そうですか。わかりました」

昨日とは違うIDカードを渡されて、リツコさんから受け取った白衣を羽織る。

「変な所、ないですか?」

「ええ。とても良く似合っているわ」

「そうですか」

白衣を着るといってお医者さんをイメージするけれど、リツコさんを見ていると科学者の人も白衣を着てたりするなあと思つて。そういうえば母さんも白衣を着ている写真が幾つか図書館で読んだ本に載っていたのを思い出した。これでまた少しだけ、母さんに近づけたかな。

「取り敢えず今日は軽く施設の見学になるわ。察しが良いあなたならわかると思うけど」

「ここで働くってことですよ? でも労働基準法なんかは大丈夫なんでしょうか」

「詳しい契約書は後で渡すことになるけど。超法規的処置という事になるわね。表向きには善意のボランティアになるのかしら。私物は来週には届くそうよ」

「わかりました」

後戻りできないところに踏み込んでしまっている。でもそれが母

さんと父さんの仕事だから。だから僕がどういったところで変わらない。今更引き返そうとも思わない。そうしたらきつと、もう父さんに見て貰えないかもしれないと思うと怖くなったから。

連れていかれたのは発令所。ネルフの司令塔みたいなところだ。

「あ、おはようございませんパイ」

「おはようマヤ。丁度良いわ。紹介するわシンジ君。わたしの部下のマヤよ。メインオペレーターもしているから何かとあなたと関わることになると思うわ」

「はじめまして。伊吹マヤです!」

「は、はじめまして。碇シンジ、です」

紹介されたのは明るめなお姉さんという感じのマヤさん。僕の名前を聞いたら少し驚いていた。

「碇って。シンジちゃん、碇司令のお子さんなの?」

「そうよ。あと、シンジ君は男の子よ」

「え? ええ!? こんなに可愛いのに男の子なんですか!」

僕が父さんの子ということよりも男だった事が更に驚く事だったらしい。自覚しているから今更どうとは思わないけれど、申し訳なさそうにマヤさんは僕に謝って来た。

「ご、ごめんなさい。本当に可愛いから女の子だと思っちゃって」「フオローになってないわよ、マヤ」

「良いんですよ。そういう身形なのは自覚してますから気にしていません」

「懐が深いわね。さて、次はわたしの部屋に行きましょうか。朝のコーヒーを入れてあげるわ」

「あ、はい」

「いいなあ。シンジ君、センパイの入れるコーヒーってとってもおいしいのよ」

「そうなんですか。楽しみだなあ」

「あなたにも後で淹れてあげるから朝のセッティング、よろしくね」

「はい! 任せてください」

そんなこんなで僕はリツコさんの部屋でコーヒーを頂くことに

なった。

リッコさんの部屋。というか仕事部屋。書類の山はあるものの綺麗に整頓されている所を見るとリッコさんは几帳面な人なのだろうか。間違ってもだらしがないという人には見えないものの、まだ知り合って1日であるからどういいう人なのかははつきりとはわからない。

「砂糖とミルクは必要かしら？」

「あ、ブラックで大丈夫です」

「そう。苦いけど大丈夫？」

「マヤさんが、リッコさんのコーヒーマイは美味しいって言ってましたから。美味しさを知るのにはブラックが一番かなって」

「ふふ。そうね。その方が苦いけど豆本来の味と香りが楽しめるわね」

そう言いながらリッコさんは豆を加熱するところから始めた。結構凝り性の人なのだろうか。

「淹れるまで少し時間が出来るから、なにかお話でもしようかしら」

「じゃあ、その。勉強でわからない所とかは」

「ええ。そういう話題でも良いわよ」

国家公務員でとても忙しい人に勉強で分からない事を訊くというのも申し訳ない気持ちになってしまうものの、それ以外に当たり障りのない話題が僕にはなかった。

「まさか大学生レベルの質問が出てくるとは思わなかったわ。中学生のあなたには早すぎる問題よ」

「ええ。でもこれくらい解けないと母さんの子供だって、胸は張れませんよ」

そう。これくらいで躓いていたらダメだ。母さんはもつとすごい人だ。だから母さんに追いついて、母さんみたいにならないと父さんは僕を見てくれない。

そして僕は母さんがしたようにエヴァに乗ることになった。

つづく。

母との約束

カタカタとタイピングの度に音を奏でるキーボード。流れていく文字の羅列。一瞬手元の本に視線を落として指を動かす。

ツターンと、エンターを押した音が余韻として広がる。

「終わりました」

「え、もう?」

そう言うのはマヤさんだった。

ネルフにやって来て数週間。僕は未だネルフの施設から外に出ることは許されていない。でもなにもしないのは暇すぎたから冬月先生からは生物学。リツコさんからプログラミングを習っていた。

でもリツコさんは忙しいから今回のようにマヤさんから教わることも多い。

プログラムがちゃんとしている事を確認してもらおう。するとマヤさんは笑顔を浮かべてノートPCを返してくれる。

「さすがねえ。ミスもない満点よ。シンジ君ってすごいよね」

「マヤさんがわかりやすく教えてくれるからですよ」

「でもシンジ君の成長はとっても早いからわたしでもあまり教えることもないけど」

「それでもわからない事はありますから。聞けるときに聞ける相手がいるのは助かります」

なにしろ国際公務員レベルの能力がなければならぬのだ。そのレベルに追いつこうと言うのだから我ながら結構な無茶はしているものの、そうでないと母さんに追いつけないのだから、ただやりこなすだけだ。

「でもあまり無理はダメよ? 目の下、うつすら隈が見えるもの」

「そうですか。なんというか、新しいことを覚えるのが楽しくてつい止め処を見失っちゃうんですよね」

「ああ。わかるわかる。やっていることが理解できて来ると止まらなくなっちゃって。気づいたら結構時間が経ってたりするのよね」

「集中していると眠いはずなのに目が冴えちゃって眠れないんですよ。頭が起きているって感じで」

「ねー。あんなっちゃうと眠るのに苦労するけど、だからって起きちゃうと後悔しちゃうのよね」

「普段起きる時間になると何故だか急に眠くなってきたって1日が辛いんですよ。居眠りするわけにもいかないですし」

「そうなのよねえ」

ネルフに来てから特に仲良くなったと思うひとりがマヤさんだった。歳も近いからか話題も合う。それに互いにリツコさんと行動を共にする事もあるから接する時間が長いのもあるかもしれない。こうして勉強も見ってくれる家庭教師の様な事をしてきているからかもしれない。

「どうだね？　ここでの生活も慣れて来たかな」

「はい。職員の人達も良くしてくれますから」

マヤさんの他に深い関わりがある人となるとやっぱり冬月先生になる。

向かい合って将棋を打つのも何回目だろうか。京都大学で教鞭を振るっていた冬月先生は将棋は趣味だと言っていた。それでも物凄く強いのは初心者の僕でもわかる。

それでも将棋を指しながらの会話は出来る程度には自分に余裕があるのがわかる。

「それは良かった。何分急に連れてきてしまったからね。新しい環境に苦心していないか心配だったのだよ」

「一応司令の息子という肩書がありますし。人によったら碇ユイの息子という肩書もあったりしますから、悪くはされたりしませんよ」

「とはいえ人とはそう単純なものでもない。君の優秀さに嫉妬や僻みを持つ者も居るかもしれん」

「たとえばそうであっても、それが人というものですから。それに優秀と言っても僕はただ努力をしているだけです。だから自分が優秀な人間と言われてもいまいちピンと来ないというか」

「謙遜も良いが、優秀なのは変わらんよ。必要以上の謙遜は敵を生む」

だけだ」

「ええ。でも僕からすればネルフの人達の方がよっぽど凄いと
思っているんです」

数週間ネルフに居るだけでもわかるのは国連直属の国際組織
なのにその年齢層が若い人達の多い事だった。平均的に20代
後半から30代前半位の人達が大勢いて、そしてみんなが国際
公務員として働いていると思うと物凄い場所に居る自分が少
し場違いに思えてしまう。

だから一層努力を忘れない。せめてここに居ても良いと思
えるくらいには何か自分にも出来ればと思つて。だからプロ
グラミングや生物学を学び始めた。母さんが習つたことは
幸いにしてその母さんの恩師の人が目の前に居るのだから。

「例えばこのケース。ひとりの男を被験者として実験を行
つたものだ。誘導催眠によって『火傷をした』という擬似的
な記憶を作り出した。明確な火傷の状態を与えると、実験後
、身体に火傷の跡が現れた。一種の体験を作り出し、他人が
その意識、記憶に干渉する事は現在でも研究が進められて
いる事だ」

「身体はなんともないのに、心がそう思つてしまう事で身
体に作用する。まるで人の心が身体を形作っている様な話
ですね」

「病は気からという先人の知恵を科学的に立証できている
という一つの例だよ。この様に人は心の在り方で自分を如
何様にでも変化させられるという事だ。心が沈んでいれ
ば病を患いやすい。逆に心が元気であれば病に打ち勝てる
かもしれない。余命幾何とも言われた不治の病の患者が
、医師が想定している時間よりも長生きするケースにも
当て嵌めることが出来る。それらの患者の共通項はわか
るかな?」

「毎日を精一杯生きている、という事でしょうか?」

「簡単に言つてしまえばな。彼らは命を諦めていないとい
う風にも取れる。健常者である我々とは違い、明日をも
知れぬ命を懸命に生き。そしてまた明日も同じように1
日を懸命に生きるといふ強い意志力が彼らを生かし続け
る」

「なら健常者である僕たちはそう言つた命の価値観が薄
いから簡単に」

病気になったり、自分を殺したりしてしまうという事なのか」

「自殺に関してはまた別に話すことになるが。当たり前の事を当たり前に過ごすのか、それともその当たり前を毎日感謝するのかでも生命力に違いは出るという実験データもあるのだよ。人の精神が身体に与える影響というのは無視できない程に重要だという事だね。この様に人は、普段体験している現実とは違うもう一つの現実を生み出す可能性を持っているものだと思うわね」

「人の意識。内面に持つ心象世界が現実を侵食する可能性がある。そういうことですか？」

「やはり君は優秀だ。その可能性も否定は出来ないという事だ」

冬月先生の授業というより講義という方が正しいのかもしれないというそれは、久しぶりに知識欲というものを刺激してくれる好きな時間だった。

母さんも同じようなことを学んでいたと考えるとやる気がいつもより数倍違う。それに自分一人だとしても何をしたいのかわからない時もあって、それでも自分の年齢に見合わない事をしている自覚はある上に周りに訊くことのできるレベルの人も居なかったのも手伝って、こうして授業を受けているという感覚はネルフに来て漸く実感できた物事の一つだった。

「でも。もしそうだったとしたら、心を無くしてしまった人は自分の形を無くしてしまうという最悪の事態になったりしませんか？」

「ほう。面白い着眼点だ。どうしてそう思ったのかな？」

「いえ。ただ。心が無いという事は自分が無い。存在感がなくなってしまうばそこに在るのは無です。自分と世界の境界線が曖昧になって、最後には無に還る。そういう事なんじゃないかって思ったんです」

どうしてそう思ったのかはわからない。ただ、そういう事さえあり得てしまうのではないか。冬月先生の言葉を聞いたらそう思ってしまった。

「人というのは普遍無意識で繋がっているという仮説もあります。も

し、そうした心を無くしてしまった人の無意識が普遍無意識を侵食してしまった場合。その無が伝染して人という存在が消えてなくなってしまう。そういう事態もあり得ないということですよ」

他人が人の意思鬼や記憶に干渉できるという事ならば、そういう事態だつてあり得ないわけじゃない。そういうSFチックなバカバカしい話なのに。何故か冬月先生はこんな僕の言葉を真剣に聞いてくれた。

「やはり君はユイ君の息子だ。…すまないが今日の授業はここまでだ。また今度にしよう」

「あ、はい。ありがとうございます」

時計を見たらいつもの予定時間を少し過ぎていた。

「ありがとうございます。失礼します」

「ああ。またいつでも来なさい」

そう言つて微笑みながら見送つてくれる冬月先生に頭を下げ、部屋を出る。これから帰つて今日の授業に対するレポートも書かないとならない。レポートは少し苦手だけれど、それでも今が楽しいと思えるから苦という程でもない。

「心が身体に与える影響…か」

だとしたら母さんになりたいと強く想えば、僕も母さんになれるのだろうか。

「そうすれば、父さんも…」

僕を見てくれるようになるだろうか。

未だに父さんとは顔も合わせられていない。



「まったく、未恐ろしい子だ」

彼を見送り、肩の緊張を解したからだろう。いつもより深く腰を椅子に預けた。

見かけだけでなく、その発想も、そして頭脳も母譲りであるらしい。何しろ母親と同じような発想に至り、切り込み口は多少ずれている

が、補完計画の概要に触れたのだ。

年齢を加味して、もしかしたら彼女以上の逸材になるのではないかと楽しみが増えてしまう。

「君が彼に出逢わせたのか？ ユイ君」

人は無意識の領域で繋がっている。

彼女のレポートに書いてあった事だ。

もしそうであるのならば、親子であればこそその繋がりが強いのであれば、彼の様子を見に行こうと思ったことも或いは彼女の意思なのではないのだろうか。

彼女に会うためにすべてを擲つ覚悟であって、その意志が微かに揺らいでいるのは紛れもない事実であった。

予想以上に碇シンジという彼女の生きた証に感化されてしまっている。

彼との講義の時間は、まるでそこに彼女が居るのではないかと錯覚するほどに充実していた。

「だからお前も会おうとはしないのか、碇」

もう一人の教え子。そして今は同じ目的の為に道を歩む協力者。

ユイ君の面影のあるシンジ君と出会う事で自分の悲願が揺らぐとでも心配しているというのならば、やつも立派な人間だったという事だ。

「いずれにせよ、いつ真実に辿り着いても不思議ではないぞ」

子供と思って甘く見ていればすべてを見透かされかねない。それをついさつき思い知ったばかりだった。

それに加えてこれからエヴァに関わって行くのだから何かの拍子で真実の鱗片を掴んでもおかしくはない。だが、彼を適格者から外すことも出来ない。それはやつが許さんだろうし、弑号機も最初の日には間に合わんだろう。故に最初の日は彼に戦って貰わなければならぬ。

「老人たちに知られれば事だぞ」

碇ユイという天に愛された才を持った彼女の損失は老人たちにも痛手であった。故にその鱗片を持つ彼を知られればそんな彼の才覚

を我が物としようとするかもしれない。

それとなく伝えれば聡い彼の事だ。その意を汲み取るかもしれないが、そうなるユイ君の事を話さなければならず。そうなれば芋蔓式にいくらの真実に彼が到達するのか。

そうなつては計画は修正できる範囲を逸脱するであろう。或いは彼が壊れるか。息子が居るのにも関わらずに全人類の命を供物にしてでも愛する彼女に会いたいというやつ目的を知るという事になるだろう。

やつに見て貰いたいのが為に、ユイ君になろうとする彼の根幹を否定する様なものなのだ。存在の根幹を失えば、どのような人間でも壊れてしまうだろう。

「残酷だな。彼の運命というものは」

故に出来ることと言えばやつ以外の生きがいを彼に見つけて貰う事だ。

ユイ君になるという別の存在の根幹を作ることが出来れば、或いは彼も壊れずに済むかもしれない。

「そう考える時点で、私もだいぶ焼きが回った証拠かな」

手もとのレポート。ユイ君のそれを見て、そして思い浮かべるのは白衣を着た少女とも思える少年の姿だった。

◆◆◆◆

僕は操縦席の様なものに座っていた。

あの紫色のロボット。エヴァンゲリオン初号機の中に僕は居る。

薄々わかっていた事だ。僕がネルフに連れてこられた理由。そして初号機を見せられた理由。いくら父さんが司令だからと言っても、ただの子供の僕が国連直属の非公開組織に來られて、更にネルフの限定でも滞在を許可されたりするわけがない。だからパイロットとしてここに座っていても大した驚きはない。

『いいシンジ君？ 何も考えないで、リラックスしていれば直ぐに終わるわ』

「はい」

リッコさんの声が聞こえる。

エヴァは動かすためにシンクロという行程が必要になる。パイロットの意識とエヴァをリンクさせることで動かせるようになる。つまりどれだけ僕自身がエヴァを自分の身体であると認識できるかによって動きやすくなるかどうか。たぶんそんなに単純じゃないのかもしれない。

エヴァが作られた理由。使徒と呼ばれる存在からサードインパクトを防ぐために作られた人造人間。

でもそこに疑問を持った。何故人造人間にする必要があったのだろうか。極端な話、単純なロボットの方が整備性や運用面でも費用対効果は人造人間を運用するよりも安い筈だ。人工筋肉の調整一つとっても苦勞するのはわかる。だからエヴァは待機している時は絶えず冷却液に浸しているという保存上の問題も抱えている。それがロボットならば劣化したパーツの取り換えで済む。でもエヴァはその構造上劣化したパーツだけを入れ替える事は出来ない。例えば人間で言えば指がケガをして一部を切除しなければならぬ場合、指ごと切らなければならぬのと同じだ。

素体は本当に人間なのだ。人の作った巨人。まさしくエヴァはそう言う存在で、人がそのまま大きくなったと考えたらリッコさんの言う究極の汎用人型決戦兵器という謳い文句も理解できる。

でもやっぱり人造人間で作るよりロボットとして作る方が改良も容易だとも思うし、生産ラインを確保すれば量産体制も容易になるはず。それを考えない様な人達じゃないはずだ。

だからエヴァには人造人間じゃないといけない秘密が隠されているのかもしれない。そして今の僕はそれを知れるような立場にも居ない。

僕は唯のパイロットだから。

『主電源接続問題なし。第一次接続開始します』

マヤさんの声も聞こえた。マヤさんが僕と関わる事が多くなると言う事もこういう事だったのかと今更ながらリッコさんの言葉の答

えが理解できた。

『エントリープラグ、注水開始』

「…っ」

事前に聞いていた。LCLという衝撃吸収材がコックピットを満たすという事。肺がLCLで満たされれば直接血液に酸素を送ってくれるという事。でもその為には意図的に溺れる様な必要がある。

溺れるというのには苦い記憶がある。大丈夫。足はちゃんと着いている。そう自分に言い聞かせてLCLを取り込む。

「うっ」

血生臭い。そう思える最悪な物だった。

『A10神経接続問題なし』

『了解。フォーマットをフェイズ2へ移行』

『パイロット、初号機と接続開始。パルス及びハーモニクスすべて正常値をクリア』

『双方境界線開きます』

『思考言語は日本語を基礎言語としてフィックス。初期コンタクト問題なし』

エントリープラグという操縦ユニットの中に光が溢れてくる。その光の中で、不思議な感覚があった。

自分という意識が何処までも広がって行くのを感じる。全身から力が抜けて、水の上に身体を浮かせているような、そんな感覚。泳げもしない僕にその感覚が当て嵌まるのかどうかはわからないものの、表現するならそんな感覚だった。

そして、光に包まれていた光景が真つ暗闇になった。

水の上に浮かんでいるような感覚から、何処かに浮いているような感覚に変わる。

目の前に様々な映像が浮かび上がる。

冬月先生の顔。リツコさんの顔。マヤさんの顔。

叔父さんや叔母さん。学校のクラスメイトの顔。

父さんの顔。

そして――。

「…かあ、さん……」

気が付けば、僕は海の上に立っていた。

何処までも広がる蒼い空と白い雲。そして目の前には白い砂浜。そこに生える一本の木の陰で赤ちゃんを抱いている女の人の姿。

「母さん！」

声を発する。でも脚が動かない。

「シンジ」

「母さんっ」

母さんが僕を見てくれた。駆け寄りたのに脚が動いてくれない。

「良いのよ。こちらに来ても」

「僕はっ」

どうして、なんで脚が動かないんだ。母さんはそこに居るのに、なんで。

「それとも、あなたが行きたいのは、あなたの後ろに無限に広がる世界なのかしら」

「僕はただ…っ」

「あなたが何処へ行こうと、私はいつもあなたを見守っているわ」

僕はただ、父さんに僕を見てほしいだけだ。でも、父さんは母さんしか見ていないから、だから僕は母さんになろうとした。まだまだ母さんには届かないけれど。

「僕は、母さんみたいになれるかな」

「…なれないわ」

「え…？」

「だって。シンジはシンジだもの。私にはなれないわ」

「でも。だって、それじゃあ…」

ダメだ。認めちゃダメだ。認めたら僕は。

「私にはなれないけれど、シンジはシンジよ。あの人と私が愛し合って生まれた子だもの」

そう言っつて、母さんは微笑みながら小指を立てた。

「私との約束。あなたが、世界中の人達の幸せを守るの」

「その為に、エヴァに乗って戦えばいいの？」

「それはひとつの手段よ。あなたが望めば、世界は変わるわ。生きていけば、そこは何処でだって楽園になるの。だって、生きているんだもの」

「母さん…」

背後からの光が増して、母さんの姿が消えて行く。

母さんは優しく微笑んでいた。母さんはここに居るんだ。ずっと、ずっと昔から。

「母さん。僕はやるよ。それが母さんとの約束だから」

いつの間にか見えている視界には真っ白い空間に小窓が3つ。小窓に見えるだけで実際は大きな窓だ。

『大丈夫、シンジ君?』

「はい。大丈夫です」

そうだ。母さんはここに居る。ずっと見守ってくれている。だから僕が初号機のパイロットなんだ。だから母さんは帰って来なかった。だから父さんは…。



サードチルドレンとエヴァ初号機との起動実験。

結果は上々。シンクロ率は42.3%からスタート。最終計測結果は120%。その事実が部外秘となり、知っているのはわたしとマヤだけ。

それからシンジ君は少し人が変わったような気がする。どう変わったのかはわからないけれど、纏う空気が軟らかくなったとも言える。

今回の実験も予定にはなかった事だ。なのに何故急にこの様なことになったのだろうか。

あの人の計画が狂わせられてしまう。その原因がよりにもよってわたしよりもあの人の付き合いの長い副司令が発端となっている。

「あの人を裏切るつもりですか。冬月副司令」

そうなる切っ掛けとも言えるのはやはりシンジ君しか考えられない

い。

母親に似ている賢くて聡い男の子。そんな彼を目の当たりにして情が湧いた。考えられなくもない話である。彼の能力は魅力的である。だから自分も彼の面倒を見ているが、それはそれである。

結果が同じなら一見無駄なこと押している自覚はある。彼は操り人形でなくてはならない。主体性を持つ人形は人形ではなく人である。それでも新しい刺激というものに、探究心の疼きに抗えていないのは自分も同じだが、それでもあの人を裏切るつもりはない。

「そろそろミサトも帰って来るころね」

作戦課として任期する前に経験を積む為に戦略自衛隊に出向中であるが、週末には彼女も戻って来る。となると彼女を彼女に紹介するという事になるのだが。

あの賢い子がミサトの器量の内に収まる未来が見えない。

いずれにしろパイロットと作戦指揮を担当する人間なのだから顔は合わせなければならぬ。

初号機は無事に起動できたというだけでも今は肩の荷が下りたのでよしとしよう。零号機のように暴走されたらたまったものじやなかったという緊張感が無意識に疲労を蓄積させていた。

「まあ。ありえなかつたでしょうけどね」

ドイツの試験でも今のところ問題はないのだから、想定以上に母親の影を追いかけているシンジ君と初号機での組み合わせで万が一にも起動時の暴走はなかつただろう。問題は戦闘時だ。

「彼女の目覚めが早くなるかもしれないわね」

それが目的なのだ。だがそうした場合、使徒を殲滅するスケジュールに支障を来す恐れもあるかもしれない。

未知過ぎるのだ。想定よりも明るく見えて深い闇を抱えてしまっている碇シンジという少年が及ぼす影響がシナリオ通りに事が運べるか否か。

だから余計な情が湧く前に彼をマヤに放り投げたというのもある。それでも毎回楽しそうに報告してくるものだからつい気になつてしまう。

「あなたはいったい何者なのかしらね」

経歴書の顔写真。中学校に上がるときの写真ですら既に母親の面影を持っていた。そして実際に会えばひとりの少女を思い浮かべる程に似ていた。二人そろって並べば姉妹に見えるだろう。そして、ここから彼がどういった答えを導くのが不思議と楽しみになっている自身を自覚する。もしそれで真実に辿り着いたとしてもあの人は止められない。

「嫌なオンナね。わたしも」

そんな親子の決して交わらない絆を思い浮かべて僅かにでも悦を感じているのだから客観的には嫌な人間なのだろう。

それでも味方をすると決めたのだ自分は。それにあの人は自分が居なければ何もできないのだから。

つづく。

使徒、襲来

特別非常事態宣言発令。

それを耳にした時、ネルフの中が慌ただしくなっても不思議と冷静でいられた。

食堂から蜘蛛の子を散らすように人が慌てて出ていった。

とはいつても僕には行くところもないから食堂で月見そばを啜ろうと箸を運んだ。

「良かった。此処に居たのね、シンジ君」

「葛城さん？」

「もう。ミサトで良いって言ったのに」

「あ、はい。すみません」

葛城ミサトさん。リツコさんの大学の同級生。作戦課の部長。僕の上司になる人だ。

リツコさんが見たまま知的な女性像なら、ミサトさんはその正反対で騒がしい感じの人。ムードメーカーと言えば良いのだろうか。

静と動という正反対の印象の二人が友人。それも仲の良い関係なのが少し不思議だった。

「慌てた様子で僕を探しに来たみたいですけど。どうかしたんですか？」

「非常事態宣言が発令されたのに落ち着いてるのね」

「別に。慌ててもなにかが変わるわけじゃありませんし。僕には行くところもないですから」

エヴァに乗ったものの、僕の扱いはまだ民間人だ。だから僕はまだネルフにおける立場を何も持っていないかった。

「では碓シンジ君。あなたをサードチルドレンとして徴兵します」

「軍人になるんですか、僕」

「非常事態宣言時における超法規的処置です。今のあなたは私たちの指示に従って貰う義務があります」

「勝手ですね。大人はいつも」

そうは言いながらも逃れられないのはわかっている。だから立ち上がってミサトさんのもとまで向かう。

「どうぞ。なんなりと好きな場所へ連れて行ってください」

「シンジ君。あなたこんなに性格悪かったっけ？」

「一方的にいきなり命令に従えなんて言われて良い気分になる人はいないと思いますよ？」

まだ数回しか顔を会わせていないミサトさん。そんなミサトさんに僕の何がわかるのかはわからないけれど、実際今はちよつと不機嫌だった。食べ物の怨みは実際深い。

「そりやそうよね。シンジ君まだ中学生だもんね。でも、私たちはあなたに頼るしかないの。あなたに人類の託すしかないの」

「：敵が来た。つて事ですすよね」

「ええ。そういうことになるわ」

「なら仕方ありませんね」

そう会話しながら足は進める。発令所に連れてこられて見たのは、スクリーンに映し出される人型の怪物。

確かにこんな怪物が相手ならエヴァのような巨人が必要になるのも頷けた。

でもそれ以上に目に入る物があつて、咄嗟にミサトさんの背に隠れた。

「シンジ君？」

なんで隠れたのか自分にも分からない。ただ父さんの背中がそこにあつた。

ミサトさんの声に気づいたらしい冬月先生が振り向いて手招きをした。多分僕にだろう。

ただ冬月先生の隣に父さんはパイプ椅子に座って前を見たままだ。漸く父さんと会えたのに。なのによりにもよつてこんな時だなんて。

だからミサトさんが態々身体をずらして僕の姿が見えるようになった事に心臓が跳び跳ねそうだった。

「頑張つてね」

そう耳打ちされて軽く背中を押された。

自分を守る盾が無くなり、更に手招きされて突っ立っているのは不自然だし失礼だろう。

「待っていたよ、シンジ君」

「は、はい…」

近くに。手を伸ばせば触れられる場所に父さんは居るのに。なのにその背中が近くて、遠くに見えた。

「……良く見ておけ、シンジ」

「え……？」

10年振りくらいに聞いた父さんの声。その第一声はそれだった。

「わかった…」

父さんが何を考えているのかわからないけれど。今、父さんは僕に、ほんの一瞬であつても意識を向けてくれた。言葉をくれた。

それだけの事なのに、とても嬉しかった。

「15年振りだな」

「ああ。間違いない。使徒だ」

使徒。そう呼ばれた怪物が画面越しにこちらに振り向いた。

V T O L がランチャーやミサイルで攻撃を加える。更に地上からもロケット弾やミサイルの嵐。爆撃機からも大型ミサイルが飛んでいく。

そんな集中砲火を受けているのに使徒はびくともしない。爆風に仰け反ったりはするものの、身体が傷ついている様には見えなかった。

「何故だ！ 直撃の筈だ!!」

「戦車大隊は壊滅。誘導、火砲、爆撃もまるで効果無しか…」

「駄目だ！ この程度の火力では埒が開かん!!」

軍服を着ている3人の軍人が一番上の上段の席に座っていた。

ネルフの中では見掛けない服装だった。どうやら今の戦闘指揮はその軍人さん達が執っているらしい。そして戦っている戦闘機にはUNの文字。となると戦っているのは国連軍の軍隊で、上の3人はその将校という事になる。

国連軍の手に負えないと判断が降されたらネルフが動くのかもしれない。

「やはりATフィールドか」

「ああ。使徒に対し通常兵器など役には立たんよ」

冬月先生と父さんの会話に耳を傾ける。

あれだけ使徒が巨大でも、人間の感覚で言えば絶えず銃で撃たれたり爆弾で攻撃されている様なもののはず。

なのに傷らしい傷がないのは冬月先生が言ったATフィールドというものの所為らしい。特殊なバリアなのだろうか。

そしてスクリーンは眩い光に包まれた。凄まじい爆発だ。まさか核兵器でも使ったんじゃないよね？

そしてその爆発の衝撃波に僅かに発令所も揺れた。

凄まじい爆発にけりは付いたと言っている軍人さん。というよりあれだけの爆発で生きている生物が居たら本物の化け物だ。

「爆心地にエネルギー反応!!」

「なんだと!？」

「映像、回復します」

更地になった街のあと。そこに腕を組み何かに耐える様に身を縮ませた使徒の姿があった。

自分達の切り札が通用しなかった。その現実には軍人さん達は深く力なく椅子に座り込んだ。

そして戦闘の指揮権が国連軍からネルフに移った。

あれだけの火力を叩き込んででも死なない化け物を相手にどうすれば良いのかなんて考えつかなかった。

「UNもぐり退散か。それで、どうするつもりだ碇」

「決まっている。初号機を発進させる」

そうしてパイプ椅子から立ち上がった父さんは漸く僕に振り向いてくれた。サングラスの奥の父さんの目は僕にはわからない。

「僕に、出来るのかな…?」

正直不安だけしかない。あの使徒と呼ばれた化け物にエヴァで戦う。言葉を思い浮かべても実感が湧かなかった。

「他の人間には無理だからな」

「……わかったよ」

正直覚悟なんて全然ない。でも父さんが僕以外には出来ないって言うてくれた。僕を必要としてくれる。そう思うと、嬉しかった。

「行つてきます。父さん」

そう言つても父さんはもう前を向いて指示を出し始めていた。僕の言葉が届いたかはわからないけれど、今はこれで良かったんだと思う。

「行けるわね？ シンジ君」

「はい」

リッコさんに連れられて、僕は発令所をあとにした。

一言でも掛けて欲しいと思つた僕はワガママなのだろうか。

でも。あんな怪物を相手にする組織の司令として命令を出す父さんの背中、今まで見た事のない仕事をする父親の背中と言うもので、少し格好良く見えた。

リッコさんに連れられて、僕はエヴァ初号機が格納されている第7ゲージに向かいながら、その間にまたもう一度エヴァについてレクチャーを受けた。

「良いこと、シンジ君。エヴァは動かすために神経接続をする関係上、ダメージがパイロットにもフィードバックされるわ。だから、エヴァとのシンクロ率が高ければ高い程、エヴァはあなたの思い通りに動くけれど、あなた自身もエヴァに近くなると考えてちょうだい」

「シンクロ率が高ければダメージのフィードバックも応じて強くなるということですよ」

「ええ。思い通りに動かすために痛みを耐えなければならぬ。これがわたしたち人類の科学の限界って所ね」

「それでも充分すごいと思いますけど」

僕が初号機に乗れるのはきつと母さんが初号機の中に居るからだ。

そんなバカな話があるわけないのに。でも、それでもわかる。母さんがエヴァで、エヴァは母さん何だつて。

だから僕はエヴァに乗れる。エヴァで使徒を倒す。

自信とか、覚悟なんてない。でも、母さんと約束したんだ。

だから僕はやる。母さんとの約束のために。父さんが望むなら。

エヴァとシンクロするためのヘッドセットを着ける。

ＬＣＬで濡れてしまうけれど、白衣も着たままだ。そうすることで少しでも母さんを感じられる要素とシンクロ率を高めるだろうファクターを用意する。

「頑張ってるね。シンジ君」

「はい。行ってきます」

リツコさんに掛けられた声を背中に、僕はエントリープラグに入る。インテリアに座り込み、プラグ挿入時に白衣が巻き込まれない様に、白衣の位置を調整する。

『パイロット、インテリアに固定完了』

『停止信号プラグ、排出終了』

『了解。エントリープラグ挿入』

『プラグ固定完了。第一次接続開始！』

忙しなく聞こえてくる外の声。初号機を動かすためにいったいどれだけの人が関わっているのだろうかと考えて、止める。

足下から上がってくるＬＣＬを感じながら心を落ち着かせる。血生臭いＬＣＬを取り込んで、また意識を広げていく。

全身を包まれるような温かい感覚に身を任せる。身体のがんが、自分という小さな存在から巨大な物に代わって行くことを受け入れる。

『シンクロ率、54%で安定。ハーモニクスすべて正常値。暴走ありません』

『行けるわ』

『発進準備！』

『発進準備!!』

『第一ロックボルト、外せ!』

『解除確認。アンビリカル・ブリッジ移動開始!』

『第一第二拘束具除去。続けて第三第四拘束具除去』

『一番から一五番までの安全装置を解除』

『内部電源充電完了!』

『外部電源コンセント異常なし』

『了解。エヴァ初号機、射出口へ！』

次々とエヴァの封印を解く様に進行する発進準備。それをコックピット越しに眺めながら、想うのはエヴァの中の母さんの事だ。

何故、母さんはエヴァの中に居るのか。その必要があるのか。エヴァとは何なのか。

考えても仕方のない事だった。でも思考を止めないわけにもいかない。何気ない思考が何か答えを拾うかもしれないからだ。

そして使徒と呼ばれる存在。

それを倒さなければサードインパクトが起きる。それが南極大陸が蒸発するほどのモノのなら、日本海と太平洋が繋がっても不思議じゃない。

そうならない為に僕はエヴァに乗って戦わなければならない。使徒を倒さなければならない。それが母さんとの約束だから。

『発進!!』

「うぐっ」

強烈なGが身体に降りかかって来る。

そしてあっという間に地表へと出た。約一か月ぶりの地上は夜だった。

『最終安全装置解除！ エヴァンゲリオン初号機、リフト・オフ!!』

身体を固定していた最後の封印が解ける。

『良いシンジ君？ 先ずは歩くことから考えて』

「歩く…」

リツコさんの声に従って歩くイメージを浮かべる。と言つても右足から前に出して一歩を歩くだけでどよめきが聞こえてくる。

『歩いた…！』

歩くだけでそんなに驚かれると少し不安になる。

思考操縦体感型の操縦システムであるならば思考が先ず第一に機体を動かしている。レバーはインダクションレバー。機体の動きの補助であつてメインはあくまでも思考。

『敵は真っ直ぐこの第三新東京市を目指しているわ。おまけに相手は

遠距離攻撃をも獲得しているから接近には注意してちょうだい」

「遠距離攻撃って」

さっきの映像では見たことのない攻撃方法。隠し持っていたと思うけれども納得いかない。先程の使徒は遠距離と言っても腕の杭の様なものでの攻撃はしたもの、それ以外に何かで攻撃した場面は見えない。

「まさか、学習した…？」

自己修復機能に自己進化までこの短時間でするというのだろうか。そうすると本当に化け物だ。エヴァだけでもお腹いっぱい、サードインパクトというものまで実感はわからないのに。それを引き起こそうとして居る敵はまるでアニメから出てきたようなデタラメ怪獣。

でも——。

「それでも、勝つんだ——！」

それが母さんとの約束を守る事になるから。そして使徒を倒せばきっと父さんだって——。

だから。

「逃げちゃダメだっ」

ぐっと手を握りしめると、エヴァも手を握りしめた。

考えていることが動きにまで反映されるとふざけた思考も出来ない。い。

だから色々考える事は後回しで、先ずは使徒を——敵を倒す事だけを考えよう。

つづく。

欠けたココロ

陽が沈み、それでも都会特有の光に満ちた摩天楼に照らされて佇む紫色の巨人。その恐怖を煽る顔と角を見て鬼を想起する者も居るだろう。或いはその巨体から神の使いではないかと思う者も居るだろう。

そんな鬼神の中。エントリープラグに座るシンジは妙に落ち着いた様子で街を歩いていた。

一步を踏み出せば足の裏に地面を踏みしめた感覚がある。インダクションレバーを握っているが、手を開いたり閉じたりすればその感覚が帰って来る。

「よし。いける」

『良いシンジ君。敵もそろそろ第三新東京市の防衛圏内に入るわ。いよいよだけど、頑張ってね』

「はい」

使徒が来るまでの僅かな間。エヴァの操縦を慣らしたシンジ。それでも14年間の人生で荒事等とは一切無縁だった彼には付け焼刃以前の問題ではあるものの、やるしかないのだ。やらなければならぬ。それが母との約束なのだから。

その決意を胸に、シンジはミサトの言葉に返事を返した。

『使徒、強羅防衛線突破！ 第三新東京市に侵入します！』

「見えた……」

山間の谷間。そこから人型の姿が見えてくる。

遠くに見える為、未だ小さく見えるもののエヴァと同等の巨体を持つ敵。使徒と呼ばれる化け物。

「リツコさん、なにか武器はあるんですか？」

シンジは通信ウィンドウに向かって問う。リツコに問うのは彼女がE計画。つまりはエヴァに関係する担当であるからだ。そしてネルフ本部の技術開発局の責任者でもあったからだ。

『現在のエヴァ初号機は標準装備のB型装備と呼ばれるものよ。その

状態のエヴァ初号機の武装は両肩のウエポンコンテナにあるプログレッシブナイフという高周波振動ナイフが装備されているわ』

「重火器の類はないんですか？ 盾とか」

モニターで観戦している間。使徒の攻撃方法は基本的には腕の光状のパイロと、N2兵器を受けたあとに見られた顔の目から放つビーム攻撃。そしてATフィールドと呼ばれるバリアらしきもの。

対する初号機は高周波振動するといえナイフ2本。

あまりにも分が悪すぎる。

『防御手段としてはエヴァは特殊なバリアであるATフィールドを展開できるわ。でもそれは使徒も持っている能力と考えられています。だからATフィールドを中和して直接攻撃する事が最も有効な手段よ』

「バリアとバリアを対消滅させて守りをなくす。でもそれだとこっちも身を守れませんよね？」

同じ防御手段を対消滅に使うのならば、さらに相手よりも何かしらの防御手段がなければ此方も攻撃を避けるという手段しなくなってしまう。

『今急ピッチで装備を用意しているわ。それまでなんとか耐えてちようだい』

「わ、わかりました……」

15年前から開発されていたエヴァ。なら武装もそれなりに開発してあるはずだ。それでも発進と一緒に用意して欲しかったと思わずにはいられなかった。

『ともかくシンジ君。今は相手の動きを見るからヘタに動かないで』
「了解しました」

敵が見えているというのに動くなというのもキツイ話だ。

ミサトの言葉に返しながら使徒に注意を向ける。

相手は遠距離攻撃も持っている。いつ撃たれるかもわからない。そんな嫌な緊張感だけが募っていく。

「っ——!!」

背筋を駆け抜けた感覚に、反射的に跳び退いていた。

『シンジ君なにを——』

通信ウィンドウから続くミサトの言葉を掻き消すように爆音と閃光が視界と聴覚を埋める。

そのままバツク転に移り、しかし初号機を追ってまた爆音が響き渡る。

そしてバツク転で着地した地面が沈み、地面から分厚い壁が生える様に現れ、一応事なきを得たシンジは飛び出しそんな鼓動を必死に抑える。

「はあ…はあ…はあ…つ。ごめんなさい。動いちゃいました…」

今の自分が軍人扱いなら上官であるミサトの動くなという命令には従わなければならないのだ。しかし指示を仰ぐ前に避けてしまった。

そんな悠長な事を言っていられないのはシンジ自身がよくわかっている。しかし軍というのは指揮系統の混乱を招くわけにはいかないのだ。

『いいえ。その程度の事なら現場の判断に委ねます。そのまま待機。向こうも遠距離は無駄だと思って此方の庭に入ってきてくれるみたいだわ』

「…了解」

彼女が柔軟な思考の上官で助かったと思いつつ、壁に背中を預けて一息吐く。心臓は煩い程に脈動しているが、今のように動くことも出来るのだと思うと戦い以外の目的でエヴァに乗ってみたかっと思ってしまう。災害救助などの非常時でもエヴァは建機よりも巨大でパワーも比べ物にもならない上に繊細な作業も出来るだろう。

そんな余計なことは今はまた考える時でもないのだが、切り替える為のクツションとしては有効である。

『っ、シンジ君今すぐ離れて!!』

「え？ うわっ!!」

そんなミサトの焦る声が聞こえてもシンジには何が起こるのかわからず。そのまま凄まじい地響きと共に背中から強い衝撃を感じて、身体が前のめりに倒れ込んでいく。

なんとかその勢いを前転に変えて転がり、素早く後ろを振り向けば粉砕された壁と、その向こうには既に使徒が佇んでいた。

「うそ、もうこんな近くに!？」

『立ち上がってシンジ君！ 体勢を立て直すのよ!』

先ほどまで数キロは離れた位置に居たはずだが、考えても仕方がない。立ち上がったシンジは使徒と相對する。こちらを威嚇する様に胸の部分の光球が光る。

「逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだっ」

僅かに気圧されそうになる意識を奮い立たせる。後退りそうな足を敢えて前に出す。

すると使徒はその場から跳び上がり、初号機に向かって飛び掛かって来る。

「このっ」

シンジは横に転がるようにイメージすると、初号機はその通りに横に転がった。先程まで初号機が居た位置に着地した使徒はその仮面の様な顔の空洞の様な目を光らせた。

「わっ!!」

身を護るように腕で顔を隠すシンジ。その動きに合わせて初号機も動いた。使徒から放たれたビームの直撃を受け、初号機は吹き飛ばされビルに激突する。

「あああああうぐっ!!」

身体のうちこちをぶつけたような痛み。そして腕に感じる火傷の様な痛み。右腕が少しだけ焼けていた。

『シンジ君しっかりして！ 早く！ 早く起き上がるのよ!!』

「つつ、こんのオ!!」

近づいてきてこちらを掴もうとしてくる使徒の腕を右手で掴む。そして左手を伸ばせばその手を使徒が右手で掴み取っ組み合いのよくな状況に陥るが、上から押さえつけられている分初号機は逃げる事も起き上がる事も出来なかった。

そんな中でシンジは使徒の右腕の肘の部分が光るのを目撃する。

「まぜ——」

しかし言葉を最後まで紡ぐことは出来なかった。

使徒と組み合っていた左腕が光の杭によつて穿たれたからである。

「う×っ、ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×ア×!!」

経験したことの無い激痛に悲鳴を上げるシンジ。手のひらから肘までを貫通しているのだ。悲鳴を上げないわけがない。

『シンジ君落ち着いて！ 貫かれたのはあなたの腕じゃないのよ!!』
そんな言葉が聞こえていても、シンジの思考ではそうは思えなかった。

いや、そう思つてはいけないのだ。エヴァを動かすという事はそういう事なのだ。

エヴァが自分で、自分がエヴァなのだ。

エヴァは操縦するのではなく、どれだけ自分がエヴァになれるのかという所にある。そう思えてならない。

そして、だからこそ――。

「……も……」

エヴァが傷ついたんじゃない。自分が傷つけられたんだ。

「よくもッ!!」

そしてエヴァは自分であると同時に母さんなんだ。

自分と母を同時に傷つけられたという事実にはシンジの頭の中は真っ白になって行くのを感じる。それが憤りという感情。怒りという想い。

憤怒という感覚に今はじめてそれを感じたシンジにその感情を止められるわけがなかった。

つまり普段大人しい人間が起こると危険という事が正に今起こつてしまったというわけだ。

普段から感情を表に出せる人間はその感情も一時的な刹那の感情として処理できる。何故なら出し馴れているからだ。

しかしそうでない人間はその感情の制御の仕方がわからないのだ。普段怒りや憤りを感じてもそれを御せる人間は多い。それでも人は誰しも許容できるものには限界がある。それが堪忍袋の尾が切れたという言葉が生まれる理由なのだ。

そして蹴り続けた腕がブチブチやらメキメキという何かを割くような音と共に千切れる。

使徒の右腕を肘から引き千切った初号機はそのまま足を自身と使徒の間に滑り込ませて思いつき蹴り飛ばす。

吹き飛んでアスファルトの道路に横たわる使徒。その間にゆらりとまるで幽鬼の様に立ち上がる初号機。

「し、シンジ、君…」

発令所では誰もが言葉を失っていた。

相手が使徒というわけのわからない化け物であっても、同じ人型という所が、初号機の猛撃に対する生理的な恐怖を抱いてしまったのだ。

ミサトの眩きにも似た声も弱々しい。

「つ、プログレッシブナイフ装備!」

日向マコトの放ったその言葉で一同に時間が戻る。

「待ってシンジ君!」

一度仕切り直しを考えたミサトは叫ぶが、それを聞いた様子もなく初号機は無事な右手にプログナイフを握りしめた。

左腕には千切れた使徒の腕を握りしめたまま夢遊病の様にふらりふらりと、しかし歩みはしっかりと真つ直ぐに使徒に向かっている。

「どうなっているのよりツコ!!」

「…おそらく、今のシンジ君に何を言っても聞こえないのかもしれないわいわ」

「どういう事よ!」

エヴァに関しては自分の何倍もの知識を持つ友人に意見を求めるミサトだったが、リツコから帰って来た答えはミサトの欲しいものではなかった。

「14歳の彼に、ましてやケンカすらしたこともなさそうなあの子がいきなり手のひらから肘を貫通するほどの激痛を受けたのよ。許容できない痛みが彼の精神をその排除に向かわせているんだわ」

「それって。そんなこと、どうにか出来ないの!?!」

「無理ね。止めようというのなら彼を眠らせるくらいよ。鎮痛剤を投与しても良いけど、そうなると判断力が鈍ってまともにエヴァを動かせなくなる可能性もあるわ」

「そんなんっ」

怒りに任せた本能的な戦い方か。それとも言葉は聞けても判断力がまともでない状態か。その二択をリツコはミサトに迫った。

最もこれはリツコ自身も想定の外だった。

普通は許容できない痛みを意識が保てずに気を失うだろう計算だったのだ。それがめっちゃくちゃな戦い方とはいえ痛み分けでも使徒と戦っているのだ。

「神経回路のフィードバック側のレギュレーターレベルをひとケタ下げられる!?!」

「はい！ やってみますっ」

マヤに指示を出しながらモニターをリツコは睨む。

これで痛みは少しは和らぐはずだ。そうでないとシナリオが狂ってしまう。

この事態にあの人はどう思っているのか。リツコはモニターを見ながら背後に居る人物へ向けて意識を向けていた。

「まさかな。このまま倒してしまいかねん勢いだな」

「問題ない。だとしても修正は効く」

上段の指揮席で腕を組みながらモニターを見るゲンドウと、その横に立って見守る冬月のネルフ本部ツートップの会話は小さくて誰にも聞こえないものだった。

モニターでは左腕から血を流しながら、一步一步ゆっくりと歩いて使徒に近づく初号機の姿があった。

使徒も立ち上がり、そして初号機に対して掴みかかろうとした時だった。

バキンツという音と共に初号機の口が開き、使徒が伸ばしてきた腕を掻い潜り、その腕に噛みついたのだった。

「…些かマズくはないか?」

「…問題ない」

「シンジ君は!？」

「モニター反応なし、生死不明!」

「初号機、完全に沈黙!」

目まぐるしく致命傷を負ってしまった初号機の状況が飛び込み、処理されていくが、戦闘指揮を預かるミストには既に戦闘継続は無理だという考えが頭でいっぱいだった。

「ミスト!!」

それを見たりツコは友人の顔と現状から作戦続行は不可能であると敢えて告げる様に彼女の名を叫んだ。

「……ここまでね。作戦中止!パイロット保護を最優先。プラグを強制射出して!!」

そして出来る事はパイロットであるシンジの生存を信じ。その回収と、それからどうやって使徒を倒すかという考えにシフトしていうとした時だった。

「ダメです!信号が受け付けられません!!」

「何ですって!？」



「……は……」

気づけば真っ暗な所に浮かんでいた。

いや。光があった。その光に向かって。ここが水の中だとわかったのは水をかき分けるように進むことが出来たからだだった。

「ぶはっ!!……ひっ!!」

水の上に出てどうにか辺りを見回して、後悔した。

巨大な、半分に分れた人の顔を見たからだ。

そして辺りは真っ赤な海だった。海なのに呼吸が出来た。髪から滴る雫を反射的に舐めたら感じたのは血生臭い味。それが血の味だとわかった。

「LCLの味だ……」

だから呼吸が出来たのだろうかという考えは端に置き。

現実の水もこんな風に息の出来る水なら泳げるのにと思いながら手でLCLをかき分けて進み、どうにか砂浜に上陸できた。

「天国って、わけじゃないよね」

先ほどまで使徒と戦っていたのに。思い出せる最後の記憶は目を貫かれる激痛だった。おそらくそこで許容を超える痛みが意識をシャツトダウンしたのだろうと見当をつける。或いはあまりの痛みにショック死したのか。

だとしたらこの真っ赤で不気味で、瓦礫ばかりの世界は何なのだろうか。

とても天国には見えなかった。

見上げれば月がある。一筋の紅い筋が浮かんでいる。

考えても仕方がない。白衣を絞って取り敢えず歩くしかなかった。そうして見つけたのは明らかに人工的な木で組まれた十字架に、釘で固定された十字架のアクセサリー。

「これって。ミサトさんの」

見覚えのあるそのアクセサリー。それは自分に指示を出す上官の女性がいつも首から下げているものにそっくりだった。

「うわああああああ!!!」

「っ、な、なに!?!」

いきなり静寂な世界に響き渡った声に驚く。

「こつちから…」

こんななにもなさそうな場所に誰かが居る。そう思って歩を進める。

そうすれば砂浜に背中を丸めている誰かが居た。

その誰かは泣いていた。

「君は…」

僕が声を掛けると、その泣いている人は肩を震わせて、僕の方を向いてきた。

「かあ、さん……?」

そこに居たのは男の子だった。僕と同じように学校の制服のズボンに、半袖のワイシャツ姿。白衣を羽織っているかいないかの違いの

姿で。そしてその顔は――。

「僕……？」

それは数年前の僕がそのまま大きくなっていけばそうになっていただろう顔の男の子だった。じゃあ自分の顔はと言われると、今の僕は母さんに寄っているとも言える。ふたりで並ぶ日があつたのならば親子というより歳の離れた姉妹に見えるかもしれない。そんな顔つきだった。

「どうして、泣いていたの？」

ともかく情報が欲しかった。と言うよりも早くどうにかしないと使徒がサードインパクトを起こしてしまうのかもしれないのだ。

「アスカが、僕は、アスカを……っ、うっ、ひぐっ」

「アスカ？」

彼の脚の下には包帯と赤いスーツの様な物と。赤い見覚えのあるヘッドセットが転がっていた。

「どうして。僕はもう一度誰かが居て欲しい世界を望んだのにどうして。ねえ、なんでなの!! 教えてよ、母さん!!」

「うっ、がっっ」

そう叫びながら彼は僕の首を絞めてくる。とてつもなく強い力で、首の骨が折れてしまうのではないかという力で。確実に気道を塞ぐのには充分な力だ。

「やっぱりダメだ。ダメだよ綾波。僕は、僕は、僕はっっ」

「っ、ぎっ、あ×っ」

このままだと殺される。そう思ってもどうしようもない。一体どんな力があるのだと言わんばかりに首を締められながら足が地面から殆ど離れて締まっている。

そんな彼の顔は見えない。いや、見る方法ならある。

苦しさを耐えながら彼に腕を伸ばす。自分よりも少し遅しい腕を伝って、言う様に伸ばした腕は彼の頬を撫でた。

その瞬間。力が少し緩んだ。

「だい、じょう、ぶ……」

「っっっ」

途切れ途切れでも紡いだ声にまた力が緩んで辛うじて息が出来るまでになった。

「大丈夫、夫……だから」

優しく頬を撫でる様にすれば、彼が膝から崩れ落ちる。それに従って僕も砂浜の上に座ることになる。

「うっ、うう、くっ、はっ、ああっ」

とても深い悲しみをその声だけでも拾うことが出来る。

「母さんっ、母さん……っ」

背骨が折れそうなほどの力で今度は抱きしめられた。

それほどまでにこの子は何を求めているのだろうか。

こんな地獄のような世界で。

赤いスーツに目が行った。女の子のものなのだろう。デザインは女の子が着る事を前提に造られているのがわかる。そして包帯。そこにはオレンジ色の液体が付着していた。

この子が求める者は何なのか。自分と同じ顔。同じ声をして。でも自分でもこんなに悲しくて絶望一色の声を出して泣いたことがあっただろうか。

母さんと言葉を紡ぐその声には藁にも縋る一縷の願いが込められている。

ひとりぼっちのこの世界で、ひとりになってしまったこの世界で。

彼は何を求めるのだろうか。何を願っているのだろうか。

「大丈夫。もう、大丈夫だから」

だからその身体を抱きしめてあげた。その頭を撫でてあげた。母さんがしてくれたように。遠い昔に、それこそ思い出せないくらい薄れてしまっているけれど、エヴァに乗った時に見た光景がその薄れてしまっている光景を補完してくれる。

「だれも傷ついたりなんかしないから。だからもう、大丈夫だから」

ぐっと抱きしめると、抱きしめ返される。

「母さん、母さん——、母さん……、かあさん」

パシヤツという音と共に世界が切り替わった。



「ここは…っ、ぐっ」

右目と左腕に激しい痛みが襲って来る。ノイズの走る視界。そこには月が見えていた。白い月が。

首だけでも起こしてみると、何かの背中が見える。

そうだ、使徒の背中だ。

使徒。神の使い。天使の名を持つ僕らの敵――。

「ぐ、っおおおおおおおおああああ!!!」

自分にも活を入れる為に叫びながら起き上がる。身体感覚が鈍かった。右目は見えない。左腕は使えない。

でも、だからどうした。

まだ右腕はある。両足も異常はない。そして噛み砕くための牙もある。ならまだ戦える。そう――。

「まだだッ!!」

思考が半分も回せない。それでもあの使徒を殺すという思考の支配に身を任せる。

殺す。絶対に殺す。

その場で跳び上がった、使徒の背中に飛び付く。

不意を打たれた使徒は反応が出来ない。そのまま押し倒す。背中から胸に打撃が受ける様に思いつき殴りつける。

「はあああああああっっ」

そのまま使徒の無事な左腕を掴み、足で使徒の背中を踏みつけながら思いつき腕を引っ張る。

ミシミシと音を立てる。構わない。ぶちぶちと音を立てて使徒の腕を引き千切る。

そして使徒の身体を蹴り飛ばす。地面を擦って行く使徒を見送り。引き千切った腕を投げ捨てる。

歯を食いしばって貫かれたままの左腕から使徒の杭と腕を引き抜く。それも捨て去る。

それでも動かせない腕は不憫に感じるものの、どうにかなる。どう

にかしてみせる。

のろのろと立ち上がる使徒がこちらを振り向く。腕がなくてもう攻撃手段もない筈。

仮面の目が光った。

それを光の壁が防いだ。これがATフィールドなのだとわかる。

これはまるで心の様だ。心の在り様のように強さが変わる。ATフィールドは人の形を作る心の壁。なら使徒にも心があるという事だ。でも許さない。

「でやああああ!!」

腕を振るう。それによってATフィールドが形を変える。鋭利な刃のように変わったATフィールドは不可視の刃となって使徒のATフィールドごと使徒の身体を切り裂いた。

血を身体から噴きだして倒れる使徒。その使徒に向かって一歩一歩近づく。ナイフはもう一本余っているけれど使わない。ナイフなんかで殺してやるもんか。

近づく僕に使徒は弱々しくその仮面の奥の目を光らせた。

その仮面を、拳で殴り毀す。

グシャツと音を立てて潰れて砕けた仮面の奥をひつつかみ、ブチブチと繊維が切れる音を聞きながら内臓を引き出す様に手加減なしで腕を引き抜いた。それでも使徒の身体はピクピクと震えている。

その胸に怪しく光る玉を思いつき殴りつける。ガラス球を叩き割るように。硬くても何度も何度も殴りつける。

粉々に砕け散っても撲り続ける。

砕けた破片が肉と混ざり合っても殴り続け、ガンツという手応えが帰って来た。

既に使徒は動かなくなっていた。その手応えはアスファルトの道路を撲ったからだ。

ゆらりと立ち上がって、胸の辺りは原型を留めない程にぐちゃぐちゃになった使徒を見下ろして、そして空を見上げた。

そこに光るのは白い月だ。赤い筋も何もない白い月がただそこに在って、僕を照らしていた。

知らない天井

「名前。決めてくれた？」

「男だったらシンジ。女だったらレイと名付ける」

「シンジ。レイ……」

夕焼けの電車の中。そんな話を話す声が聞こえてきた。

それは父さんと母さんの声だった。

僕の名前は父さんが考えてくれた名前だったんだ。

「でも。父さんは僕を恨んでいた。母さんの愛情を一心に受けていた僕を」

「父さんは僕を見てくれない。だから僕は母さんみたいになりたかった。母さんを愛している父さんなら、母さんみたいになつた僕を見てくださいと思ったから」

はじめて母さんのお墓参りに行ったとき、父さんはお墓の前で泣き崩れて、母さんの名前を呼んでいた。

多分、僕が母さんの様になりたいと思つた原点はそこだったのかも。しれない。

「無駄だよ。父さんは母さんしか見ていないんだ。僕がなにをしても、なにをやっても。父さんは僕を見てくれない」

「それでも僕は諦めない。今まで母さんみたいになろうとして生きてきた事を今更辞められない」

「どんなに頑張つても、誰も僕を見てくれない。エヴァに乗っているから、エヴァに乗っている僕は見てくなくても、僕を誰も見てくれない」
「それでも僕は諦めない。きつと父さんを振り向かせてみせる」

椅子に座つて平行線に進む会話を続ける僕たち。

僕がどんな道を歩んできたのかはわからない。でも僕は僕だ。

母さんとの約束を守るためにエヴァに乗る。そして父さんが僕を見てくれるまで諦めたりはしない。だってそれを諦めてしまつたら、僕の今までの人生がすべて無意味になつてしまうから。

「だから僕は諦めない。誓つたから。母さんと、あの日に」

プールに行った帰りの道で、僕は母さんと約束をした。
世界中の人達の幸せを守るって。

それが使徒を倒してエヴァに乗ることが、今の僕に出来る母さんと
の約束の果たし方だから。

「だから僕は戦う。世界中の人達の幸せを守る為に」

母さんとの約束を覚えていなかったら、僕はこんなにも強い自分の
願いを持てなかったかもしれない。

それはきつと、心の弱い僕がたどり着いてしまう結末だったのかも
しれない。

それでも。僕は僕だ。

冬月先生も。リツコさんも。マヤさんも。父さんも。

僕の世界はとても小さくて狭いけれど。

それでも僕を取り巻く世界が好きだから。

そんな世界を守りたいから、僕はエヴァに乗ることを決めただ。

「……………知らない天井だ」

いつの間にか知らない天井を見上げていた。

「いっつ……………」

身体を動かそうとして、左腕と頭の右側に酷い痛みを感じた。

左腕は包帯を巻かれていた。ギブスで固定されている。思い出す
のはエヴァのズタズタにされた左腕。

そして視界がいつもより狭いのは右目が見えていないからだとな
かった。

あれからどうなったのか。使徒を倒したところまでは覚えている。
だからまだ世界は滅んだりしていないはず。ここが天国だったら別
の話になるけれども。

取り敢えず起きたことを報せるためにナースコールを探すものの。

左腕は動かせない。右腕には点滴が打たれていて、こっちもあまり
動かさない方が良さだろう。減り具合から見て30分もすれば点滴
は終わる。そうしたら看護婦さんが様子でも見に来るだろうと判断
して、瞼を閉じた。



ネルフのとある部屋。そこではリアルタイム回線によってとある会議が行われていた。

「碇君。ネルフとエヴァ、もう少し上手く使えんのかね」

「零号機に引き続き君らが初陣で壊した初号機の修理代。幸い第三新東京市自体の被害は軽微とはいえ、国がひとつ傾くよ」

「いずれにせよ。使徒再来によるスケジュールの遅延は認められない。人類補完計画は我々にとって唯一の希望なのだ。予算については一考しよう」

「わかっております。すべてはゼーレのシナリオ通りに」

ゼーレの各国代表からの言葉も、ゲンドウは話し半分聞き逃しながら何時ものようにそう締めくくった。そのまま会議が終わるのかと思えば、今日は少し異なっていた。

「しかし。初陣とはいえ単独で使徒を倒し、且つその生体サンプルをも確保するとは。やはり天才の血は受け継がれている様ですな」

「碇シンジ。あの天才碇ユイの一人息子か。風の噂では既に大学レベルの勉学に励んでいるそうじゃないか」

「しかし、先の戦闘により負傷。全治一ヶ月だそうじゃないか。これでは万が一の時に使徒の迎撃どころではないのではないかね？」

「問題ありません。多少の傷を負ってはいいても、エヴァは動かすことが出来ますので」

「しかし万が一とも限らん。ドイツより戦力を回す。有効に使いたまえ」

キール議長の言葉に、サングラスの奥でゲンドウは訝しんだ。ドイツの式号機は最終調整中で、日本に届けられるのは数カ月先の話だったはずだ。

「その戦力とは式号機ですか？」

「いや。5号機を送る。パイロットを付随してな」

「了解いたしました」

会議は終わり、ゲンドウの横に控えていた冬月が口を開いた。

「まさかゼーレが直接送り込んでくるとはな」

「問題ない」

そのゲンドウの言葉にやれやれと肩を落としたくなる気分だった。その問題ないという言葉は結局面倒ごとはすべて此方に押し付けるという意味だった。

「だがな碓。ゼーレがシンジ君に興味を持ち始めたという事は存外に厄介やも知れんぞ」

「そうであっても奴はユイではない。ユイの代わりなど果たせるわけがない」

不器用な親子だと冬月は思う。

シンジが母親の様になりたいと願うのは父親に自分を見て貰いたいからという想いがあつての事で、それによって碓シンジという人間は構成されている。

だが父親のゲンドウは妻であるユイだけを見ている。それを知ればシンジの心はどうなるだろうか。存在の根底から崩れるようなことを彼は受け入れられるのだろうか。

だがシンジは聡い子でもある。父親本人にそれを言われても、別の取り方をするのではないかという可能性も冬月は考えていた。

「何処へ行く冬月」

「なに。教え子の見舞いだ」

途中で道を分かれた所でゲンドウが冬月に声を掛けた。司令室に戻る道すからは同じで、途中で分かれる事はないのだが。シンジを見舞うのには別の方向に向かう道になる。

「お前も少しは親らしいことをしてみたらどうだ？」

「必要ない」

そう言つてゲンドウは立ち去つてしまう。社交性という意味でも壊滅的な教え子にやれやれと思いつながら、新しい教え子の見舞い品を考えながら冬月も歩を進めるのだった。



点滴も終わってやることもなくボーっとしていたシンジに來客を告げるドアのノックが聞こえた。

「どうぞ」

「お邪魔するわよ?」

「リツコさん?」

部屋に入って来たのはリツコだった。

「あら。わたしがお見舞いに来るのがそんなに意外だったかしら?」

「い、いえ。そんなことは」

ただ。かなりメチャクチャにしたとはいえ、使徒という未知の敵のサンプルにエヴァも壊してしまったシンジからすれば、エヴァ関連の技術部門のトップであり科学者の彼女が自分を見舞いにやってくる程の時間が取れるとは思わなかったからだ。

「あなたもどちらかと言えばわたしに近いから、考えていることはなんとなくわかるわ。だからそんな働きをしたあなたを労う意味は充分に持っていると思うのだけれど?」

「いえ。はい。ありがとうございます」

椅子に腰かけて態々足を組むリツコから視線を上げると、彼女は普段よりもまた少し真剣な表情になって。それにつられてシンジも背筋を伸ばした。

「あなたのケガの事だけれど。目と腕はどちらも全治一か月という程度の物よ」

「そうですか」

治ると言われてシンジは内心でホッとした。目はまだともかく、腕が使えなくなるといふのはとてつもない不自由な生活を強いられる覚悟すらしていたからだった。

「それでも何時また使徒が攻めてくるとも限らないから、引き続きあなたにはこの第三新東京市に留まって貰うわ」

「はい」

なんとなくはそう思っていた事だったので今更驚かない。出なければ第二東京から態々すべての荷物を移す必要がないからだ。

「そして訓練になるのだけれど。その腕が完治するまではエヴァとの

シンクロテストと、仮想空間での操縦訓練になると思うわ」

それも予想できたので頷く事で返事を返す。恐らくエヴァを動かすにあたってイメージだけでなくパイロット本人の身体訓練も組まれていたのだろう。しかし腕の有り様でそういった類の訓練はしばらくは免除されるらしい。運動があまり得意ではないインドア派のシンジからしてそれは歓迎できる事柄だった。

「それと。学校の転入手続きも終わっているからいつでも通えるようにはなっているわ」

「学校？ 行くんですか？」

使徒との戦いがある今のご時世にパイロットの自分が学校に通っていられる時間があるのだろうかと思っただけのもの、それをシンジよりも頭の良いリツコが考えつかないわけもなかった。

「確かにあなたの学力なら通わなくても問題ないし。ネルフで家庭教師に習う事も出来るけれど、あなたはまだ中学生。学校というコミュニケーションのなかで培われるものは決して勉学では得られないもの。だから学校にはちゃんと通いなさい。友達を作っても良いわ。この第三新東京市が、これからあなたが生活していく街になるのだから」

「そうですか」

学校に通うという意味の重要性を説かれ、友達を作れとも言われたものの。シンジにとって友達とも呼べる存在というのは本当に一握りであった。

いつか自分は父さんの所に行くのだと考えていたシンジは、わかれることになるのだからと必要以上に友好関係を結ばなかった。故に友人と呼べる存在は本当に少ないのだ。そして別れもなく第三新東京市——ネルフにやってきてしまったのだ。今更連絡するにも少々気まずいこともあった。

「友達は良いわよ？ 自分の周りの大人や親に相談出来ない事だつて。友達だから話せることもあるわ」

「あるんですか？ リツコさんにも」

「ええ」

シンジから見てそんな風には見えませんが自分で何でもかんでも解決し

てしまいそんな完璧主義者に見えるリツコでも普通に人に頼る部分もあるのだというシンパシーを感じていた。

母であるユイに近づこうとなんでもすべて自分で熟してきたシンジだからこそ思う完璧主義という言葉の大きな壁。そんな壁に躓いていれば自分は一生かかっても母の様にはなれなかつただろう。

だがネルフにやって来て。母の恩師である冬月や最高随の頭脳を持つリツコ。その部下でもあるマヤに教えを受けられて再び自分の歩みが進んでいることを感じられたシンジはそんな一人であるリツコの新しい一面。というよりリツコもまた普通に人間なのだと改めて実感できて言い表せない嬉しさというものを感じていた。

「話は変わるけれど。学校に通う為には今いる部屋だと何かと不便だから地上に部屋を借りる予定でいるけど。それでも良いかしら？」

「あ、はい。お任せします」

という話を持つてくるという事は、今自分の身の回りの処理はリツコがしているという事なのだろうかと思ひ。感謝と申し訳なきが同時に襲ってきた。

リツコの忙しさというのは普段から窺い知れたことで。そんな忙しい人に自分の身の回りの処理もさせてしまうことの申し訳なき。それでも色々と手を回してくれることの嬉しさというものがあつた。

「それじゃあ。わたしはそろそろ行くわね」

「はい。ありがとうございます」

「元氣になったら、なんかご馳走してちょうだい。それでチャラよ」

「はい」

その辺りはちやつかりとしていると思ひながらリツコを見送つた。やはりひとりになると一抹の寂しさを感じる。

前はそうでもなかつた。家に帰ればひとりであることが当たり前だつたから。

しかしネルフに来てからは誰かと関わる毎日だつた。その多くはマヤであり。冬月であり。リツコだつた。

「人が恋しいと思うなんて。思わなかつたなあ」

それこそ風邪を患おうが何をしようがひとりで生きてきた。離れ

に暮らすようになってからは食事も自分で用意する様になった。なにもかも全部自分で。自分だけで。

だとすると、はじめて他人に料理を作るのはリツコが初めての相手だという事になる。

「頑張ろう…」

少なからず、尊敬する人に対して落胆させない様に腕に頼を掛けようとシンジは決意するのだった。

するとまたノックが聞こえてきた。入室を許可すると、これまた忙しくてここには来れそうにない人がやって来たのだ。

「冬月先生！」

「おはようシンジ君。思ったよりも元気そうだね」

「あ、はい。なんとか」

ネルフ本部の副司令が見舞いにやって来るといふ事に少なからずシンジも身持ちが固くなってしまふ。とはいえ、最初に会った日のようにお見舞いに来て大丈夫なように予定は開けてきたのだろうと考え。自分なんかの為に予定を開けてまで見舞いに来させてしまつた事に申し訳なく思ってしまう。

「おや。やはり私の様な年寄りはお呼びでなかったかな？」

「そ、そんなことありません！ ただ、申し訳なくて」

「君はもう少し他人に気を使われることに慣れた方が良いな」

冬月は持参した花束と果物の入った籠を備え付けのテーブルに置くと、先程までリツコが座っていた椅子に腰かけた。

「どうかな気分のほどは？」

「良好です。といつても身体のあちこち痛いですけど」

「いきなりの実戦だったからな。だが使徒のサンプルが手に入った事には上の機嫌も良かったよ」

「そうですか」

正直知らない人の評価というのにシンジは興味がなかったが。そうは言ってられないのが宮仕えというものだという事も理解している。

人類の命運を分ける戦いにそんな利権絡みの事を考えて行動する

人間が居るといふ事実には悲しい物を感じるが、そういつた事柄に自分はそこまで関わる事はないだろうと思う。それは目の前に居る師の仕事の範疇だろう。自分に出来る事はその師が必要以上に頭を悩ませない様に上手く戦うことぐらいだろう。

「やれやれ。やはり君は賢いな。いや、賢過ぎるとも言っても良い。君がそのように気にして窮地に陥るくらいならば、細事は気にせず自分のやり易い様に戦うと良い」

「ですけど…」

「その為に我々大人は存在している。君は何も気にせず、存分に戦いたまえ」

「…はい。ありがとうございます」

今はまだ、エヴァに乗っているからこそ価値がある自分の事しか見られないというのは仕方のない事だ。

だけれども、それ以外に何か自分の勝ちを作ろうとしたのだろうか？

それが作れるとも限らない。だが、それでも何かを能動的に熟したのだろうか。作ろうと努力したのだろうか。

自分は努力した。そして今もしている。

母さんみたいになれるように、自分なりに。そして今は教えを請い。そして再び自分の目的に向かって努力を続けている。立ち止まらずに、ひたすら目標に向かっていく。

そうする事しか知らないから、目標の為に生きているという人としてズレていることはわかっている。でも、自分という人間が他に術を知らないのだ。

10数年続けている生き方を途中で変える事も、やめることも出来ない。だから目的を目指しながら新しい目的を今探してい居る所だ。

いや、ひとつはある。

母さんとの約束を守る事だ。

世界中の人達の幸せを守る事。

途方もないことかもしれない。それが具体的に何なのかはわからなかった。

それでもエヴァを造った母さんの言葉だ。今はエヴァで戦う事が母さんとの約束を守る事に繋がっている筈だ。そして母さんもまた、それはひとつの手段だと言っていた。他にもあるのかとも思うものの、今はエヴァに乗って戦う以外に思いつかないのだからそれで良いとも思った。

数日の検査入院を経て、僕は漸く退院出来る事になった。それでも、父さんは一度も僕をお見舞いに来てはくれなかった。

きつと父さんは忙しいんだろうと自分を誤魔化す事で、胸の奥で考えている事に蓋を閉じた。

つづく。